

親鸞聖人のご病気

坂東曲

浅草東本願寺の報恩講では最終日の結願日中法要で「坂東曲」が唱えられるが、これは湖沼を荒波の中、揺れる船の中で同行と大勢で念仏や和讃を唱えた様子を表している。

承元の法難

承元（1207）の法難で後鳥羽上皇の私憤のため、法然上人（75 歳）を始め聖人（35 歳）や多くの念仏の僧侶・信者が死罪や追放となった。当時、僧侶は処刑できなかったため、聖人は愚禿善信“藤井元彦”という俗名を付けられ僧籍を剥奪されてから流刑となり、約 5 年の間、越後で生活された。皮肉なことに、後鳥羽上皇はこの 17 年後に隠岐島に島流しとなっている。その孫が箱根で聖人の弟子となり嘉念坊善俊の名を頂いて飛騨白川郷地方に入り、布教に努めた。

廻心

聖人一家は建保 2 年（1214）上野国佐貫荘（群馬県巴楽郡板倉町）に立ち寄られ、聖人はこの地で浄土三部経を千部読誦しようと試みられたと記述されている。また『恵信尼書状』によると、風邪で高熱を出し重病となった。比叡山で漢方を学んだとしても、薬などに頼らず、全て阿弥陀様にお任せするしかなかった。その時、聖人は夢の中で三部経を千部読もうとしたが、「いずれの行も及びがたき身」という自覚が聖人の全身に満ちてきて思いとどまった。自力の念仏から他力の念仏へ変わったのであった。聖人 42 歳の時である。お釈迦様もガリガリに痩せられた難行苦行の修行から脱し、ニレンジャナ川のほとりでスジャータからもらった乳粥を飲んだことと同様、難行苦行の自力から乳粥をいただいて覚ったお釈迦様の歴史に通じるような考え方の一大変化であった。

東本願寺学院教授の藤井哲雄先生のお供で親鸞聖人が高熱を出されたという佐貫荘（板倉）を尋ねた。そこに宗願寺と宝福寺という真言宗の寺院があり、聖人の高弟である性信坊の座高 80 cm の木像が宝福寺に祭られている。昭和 37 年発見で、銘文から横曽根門徒の法福寺という寺院であることがわかった。かつてここには聖徳太子が建てた祠があり、太子の立像があった。

聖人が 85 歳、正嘉元年(1257)閏 3 月 3 日の手紙（『末灯抄』8）では「目も見えず候、なにごとみな忘れて候…」と書いてあり、翌年の 10 月には咳病（咳の激しく出る気管支炎か）を患っていたことが『蓮位坊親筆添状 慶信坊宛』からわかる。



性信坊座像



自然法爾

人間は年齢を重ねると、誰でも程度の差こそあれ、老化に対面することは自然のならわしであり、老化に抵抗することは不可能である。古来、長寿を願って皇帝から一市民まで偉い努力が重ねられたが、結局どれも成功することはなかった。聖人はこれを「自然法爾」という言葉で示されたのである（『親鸞聖人の生涯-下巻』藤井哲雄著）。「自然」というのは、「おのずからしからしむ」ということで、人間の計らいの及ぶところではない。「法爾」というのは、「法のまま、如来のお誓いである」ということで、阿弥陀様のお計らいが人間を「無上仏」にさせようと誓っていらっしゃることであり、それは「形もなく色も無い」阿弥陀そのものの働きである。すべての衆生は阿弥陀さまに一切お任せすることが出来るようになるのが「自然法爾」の示すところであり、これが仏の智慧の不思議であると、何の疑いも無く仏智を信じる事が出来る人が救われることを、親鸞聖人は説かれたのである。

(以 上)